



2022年度 第1回 太平洋いわし類・マアジ・さば類長期漁海況予報

— 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
水産資源研究所がとりまとめた結果 —

今後の見通し(2022年8月~12月)のポイント

海況

黒潮はA型^(※1)基調で推移する。沿岸水温は、潮岬以西は9月頃まで「平年並」^(※2)~「高め」^(※2)でその後は「低め」^(※2)~「平年並」、熊野灘~遠州灘~相模湾は「平年並」~「高め」で暖水波及時に「極めて高め」^(※2)、伊豆諸島海域は概ね「高め」~「極めて高め」で八丈島周辺では一時的に「平年並」、房総~常磐南部海域は「平年並」~「高め」で推移する。

※1 黒潮を遠州灘沖から伊豆諸島周辺海域の流路で分類する

A型：流路南端が北緯32度以南

※2 平年並=平年値±0.5℃程度、高め・低め=平年値±1.5℃程度、極めて高め=平年値+2.5℃以上。

ただし、鹿島灘~常磐南部海域の基準は次頁末尾を参照のこと。

漁況(来遊量予測)

マイワシ

相模湾以西では前年並~下回り、房総以北では前年並~上回る。

カタクチイワシ

依然として低水準であり、全体としては前年並。

ウルメイワシ

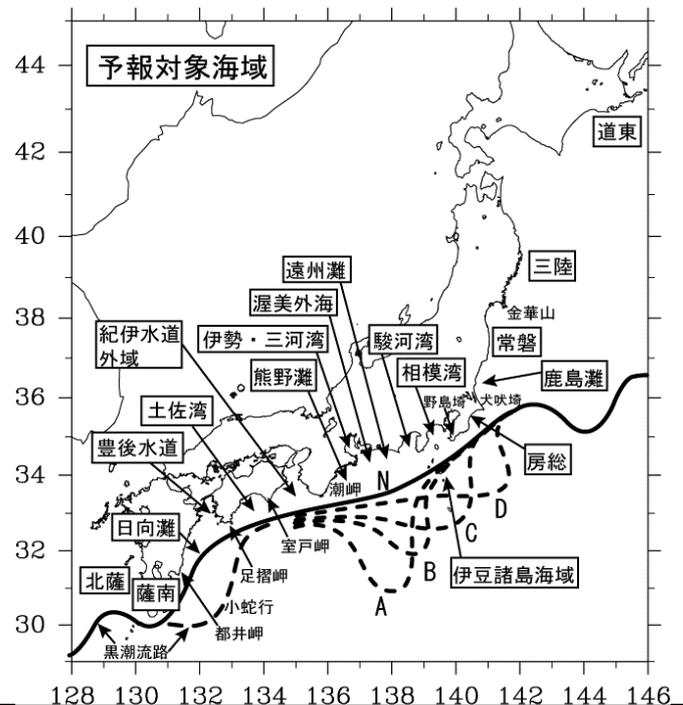
前年を下回る。

マアジ

海域によって異なるが、全体として前年並。

マサバ・ゴマサバ

マサバは犬吠以北では前年を上回り、伊豆諸島以西では前年を下回る。ゴマサバは低水準。



問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構

担当 企画調整部門(横浜) 上原

漁況：浮魚資源部(横浜) 福若、由上、古市、井元、木下、渡邊

海況：海洋環境部(横浜) 栗田、安倍

電話：045-788-7615、ファックス：045-788-5001

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease>

中央ブロック海況予報

今後の見通し（2022年8月～12月）

(1) 黒潮（注：黒潮流型は図1を参照のこと）

◎潮岬以西

- ・都井岬沖では、9月までは接岸傾向で、その後は離岸傾向で推移する。
- ・足摺岬～潮岬沖では、離岸傾向で推移するものの、一時的に接岸傾向となる。

◎潮岬以東

- ・大蛇行が継続し、A型基調で推移する。
- ・蛇行北上部は伊豆諸島海域の西側に位置し、熊野灘～遠州灘に近づくことが多い。
- ・房総沖では、離接岸を繰り返す。

(2) 薩南～房総海域

- ・都井岬～足摺岬沖は、9月までは黒潮系暖水の影響が大きい、その後は冷水に覆われることが多い。
- ・室戸岬～潮岬沖は、冷水域となるものの、黒潮から暖水が波及することが多い。
- ・熊野灘～遠州灘～相模湾は、黒潮の接近や黒潮系水の波及に伴い暖水に覆われる。
- ・伊豆諸島海域は、概ね暖水に覆われる。
- ・房総沖では、黒潮から暖水が波及しやすいものの、一時的に沿岸水が分布することがある。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・黒潮から暖水が波及しやすい。

(4) 沿岸水温

- ・紀伊水道以西は、9月頃まで「平年並」～「高め」で推移し、その後は「低め」～「平年並」で推移する。
- ・熊野灘～遠州灘～相模湾は、「平年並」～「高め」で推移し、暖水波及時には「極めて高め」となることがある。
- ・伊豆諸島海域は、概ね「高め」～「極めて高め」で推移するが、八丈島周辺では一時的に「平年並」となることがある
- ・房総海域～常磐南部海域は、「平年並」～「高め」で推移する。

※ 平年並＝平年値±0.5℃程度、（やや高め、やや低め）＝平年値±1.0℃程度、
（高め、低め）＝平年値±1.5℃程度、（極めて高め、極めて低め）＝平年値±2.5℃以上
（鹿島灘～常磐南部海域では、平年並＝平年値±1.5℃程度、（やや高め、やや低め）＝平年値±1.6～3.9℃程度、
（高め、低め）＝平年値±4.0～6.0℃程度、（極めて高め、極めて低め）＝平年値±6.1℃以上）

経過（2022年3月～2022年7月）（注：経過は図2を参照のこと）

(1) 黒潮

- ・ A型流路の大蛇行が継続した。
- ・ 3月、小蛇行の東進に伴い都井岬～遠州灘沖で大きく離岸した。
- ・ 4月下旬～5月上旬にかけて、2月に蛇行部から切離した冷水渦が九州南方で結合し、小蛇行が発達した。
- ・ 4月～7月にかけて、蛇行北上部が遠州灘沖でS字状となり、黒潮屈曲部が熊野灘～遠州灘に接近することが多かった。
- ・ 房総沖では、3月下旬～5月下旬に一時的に離岸した以外は、「平均的な位置」で推移した。

(2) 薩南～房総海域

◎薩南海域

- ・ 黒潮北縁は、4月～5月は「平均的な位置」、6月は「離岸」で推移した。

◎潮岬以西

- ・ 都井岬沖では、3月は離岸傾向、4月～5月中旬は接岸傾向、その後は概ね離岸傾向で推移した。
- ・ 足摺岬沖では、3月上旬～4月中旬は「著しく離岸」、4月下旬～5月上旬に「やや離岸」、5月下旬には「接岸」、6月以降は「やや離岸」～「著しく離岸」で推移した。
- ・ 室戸岬沖～紀伊水道外域では、期間を通じて概ね離岸で推移したが、黒潮が熊野灘に接近した際に黒潮北縁から繰り返し暖水が波及した。

◎潮岬以東

- ・ 4月以降はS字状となった蛇行北上部が繰り返し熊野灘に接近し、熊野灘～遠州灘に黒潮系暖水が頻繁に波及した。
- ・ 駿河湾、大島西水道へ向けて断続的に暖水が波及した。
- ・ 3月下旬～4月上旬にかけて黒潮は八丈島付近を北東向きに流れ、以降は三宅島～御蔵島沖付近を北東～東向きに流れた。
- ・ 房総海域の黒潮は概ね「平均的な位置」で推移したが、3月下旬～5月下旬に小さな擾乱に伴い、一時的に離岸した。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・ 3月～5月にかけて黒潮系暖水の波及がみられたが、6月以降は黒潮の離岸傾向に伴い、沿岸では暖水波及の影響が弱まった。

現況（2022年7月27日現在）

(1) 黒潮

- ・ A型流路であり、大蛇行が継続している。
- ・ 足摺岬沖から大きく離岸した後、遠州灘沖で 30°N 付近まで南下し、S 字状に北上しながら大王崎～石廊崎沖に近づいた後、三宅島付近から北東へ流れている。

(2) 薩南～房総海域

◎潮岬以西

- ・ 黒潮は、都井岬で「かなり離岸」、足摺岬～潮岬沖で「かなり離岸」～「著しく離岸」している。

◎潮岬以東

- ・ 熊野灘～遠州灘沖に、黒潮系暖水がみられる。
- ・ 伊豆諸島海域は、暖水に覆われている。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・ 冷水域がみられる。

※ 黒潮の離接岸に関する語句表記は、川合英夫(1972)：海洋物理Ⅱ、東海大学出版会に準じた。

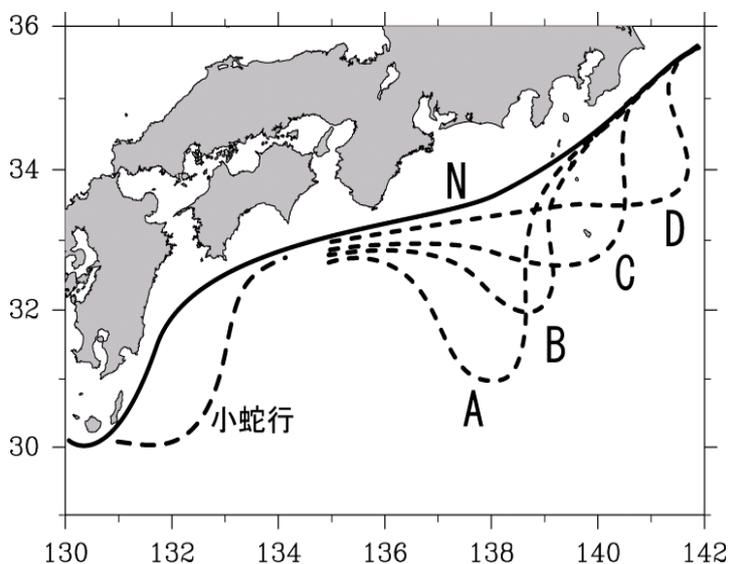


図1 黒潮流型の分類

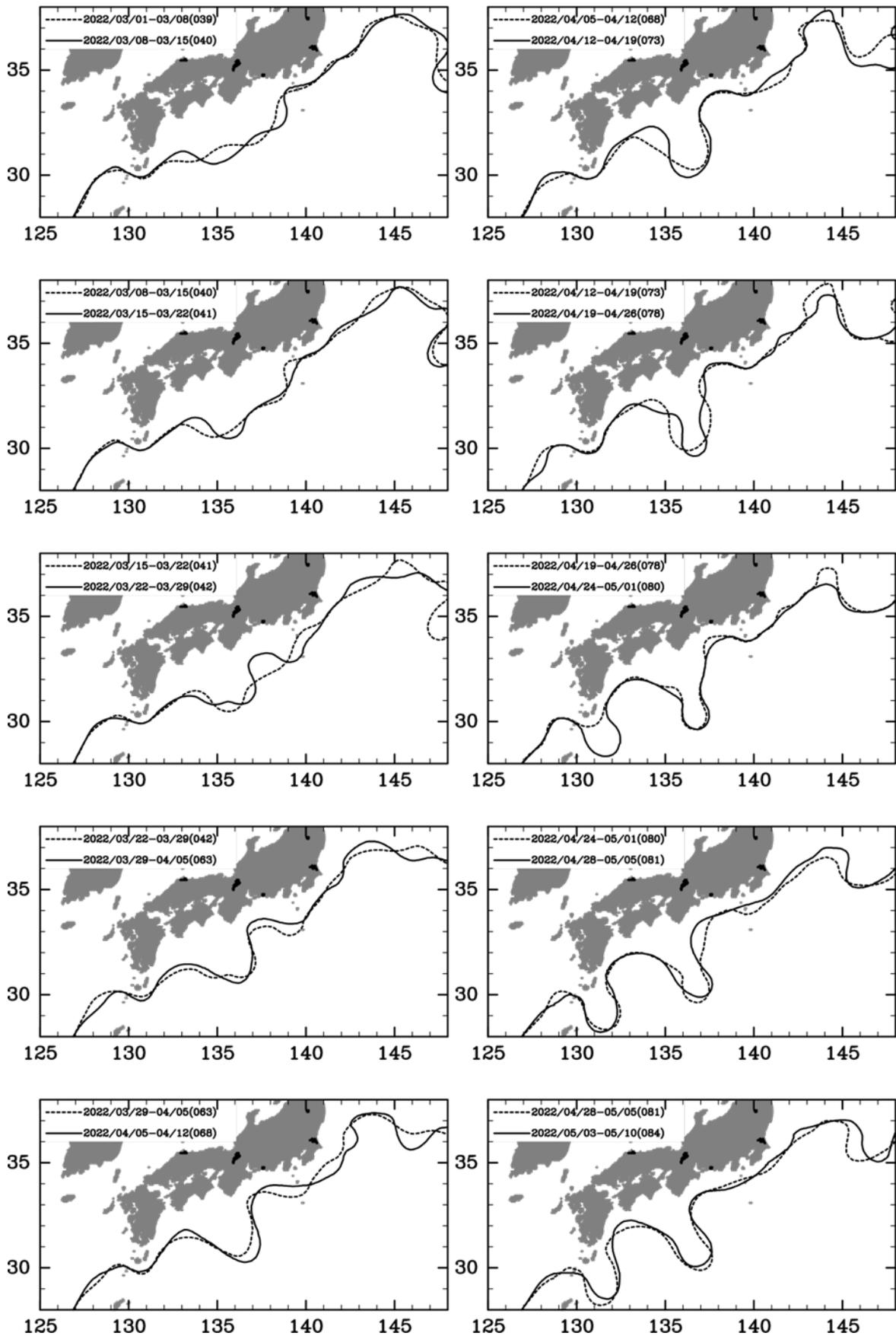


図2 黒潮流軸のパターン

(2022年3月~5月、海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

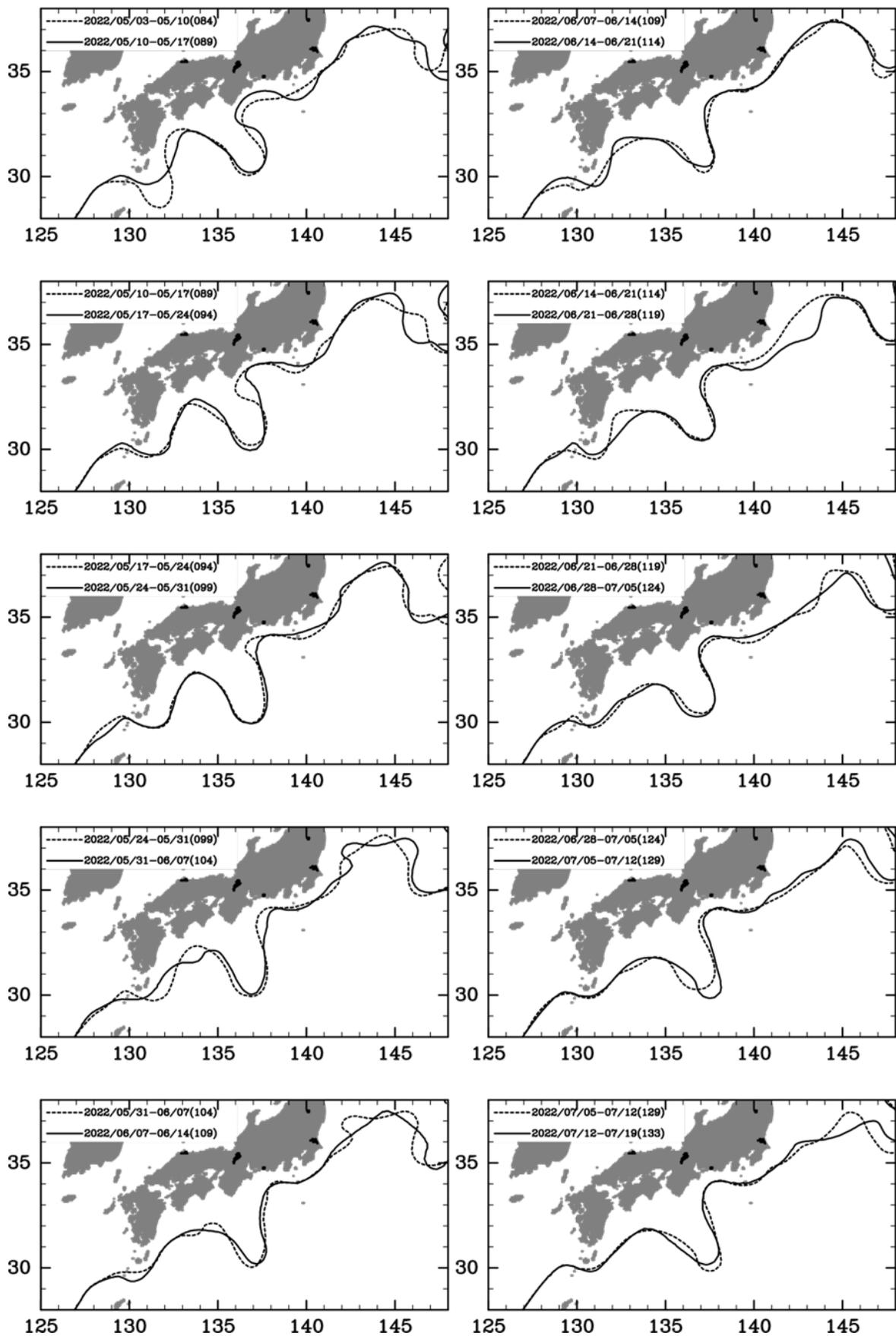


図2 (つづき) 黒潮流軸のパターン

(2022年5月~7月、海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

マイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2022年8月～12月）

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、船曳網

対象魚群：0歳魚（2022年級群）、1歳魚（2021年級群）、2歳魚（2020年級群）、3歳魚（2019年級群）、4歳魚（2018年級群）。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 北薩～熊野灘（まき網、定置網）

(1) 来遊量：北薩～豊後水道東側中南部では前年を下回る。宿毛湾、土佐湾では前年並～下回る。紀伊水道外域では前年並。熊野灘では前年を下回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：8 cm～16 cm 前後の0歳魚主体に漁獲され、16 cm 以上の1歳以上が混じる。

2. 伊勢・三河湾～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

(1) 来遊量：伊勢・三河湾、渥美外海では前年を下回る。駿河湾～相模湾では低水準であった前年並。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：10 cm～15 cm 前後の0歳魚主体に漁獲され、15 cm 以上の1歳以上が混じる。

3. 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：前年並～上回る。

(2) 漁期・漁場：まき網は、8月～10月は道東海域が主漁場となり、三陸～房総海域は小規模な漁場形成となる。11月～12月には三陸海域で漁場が形成される。定置網は、各地で期を通じて散発的に漁獲されるが、12月以降に本格化する。

(3) 魚体：10 cm～14 cm 前後の0歳魚、14 cm～17 cm 前後の1歳魚、15 cm～18 cm 前後の2歳魚、16 cm～20 cm 前後の3歳魚、18 cm 以上の4歳魚が漁獲される。

漁況の経過（2022年4月～6月）および見通し（2022年8月～12月）についての説明

1. 資源状態

マイワシ太平洋系群の資源量は、1980年代は1,000万トン以上の高い水準で推移したが、1990年代に入って急減し、2002年以降2009年まで10万トン前後の低い水準で推移した。その後、2010年～2014年に比較的良好な加入が続いたこと、および漁獲圧が低下したことにより資源量は増加し、2014年には100万トンを上回った。その後も良好な加入が続いたことにより資源量はさらに増加して、2020年は321万トンと推定された（2021年度資源評価）。

2018年級群（4歳魚）は、加入量が568億尾と推定されており、最近10年（以下、近年）において最も高い値となっている。2021年における3歳魚としての漁獲状況も前年を上回っており、高い豊度を示している。2018年級群の推定残存資源量は、2017年級群の同時期を上回っている。

2019年級群（3歳魚）は、加入量が342億尾と推定されており、近年の高い水準を維持するものの2018年級群を下回る値となっている。2021年における2歳魚としての漁獲状況も、前年を下回った。2019年級群の残存資源量は、2018年級群の同時期を下回っている。

2020年級群（2歳魚）は、加入量が442億尾と推定されており、2019年級群を上回る値となっている。2021年における1歳魚としての漁獲状況は、前年並となっている。2020年級群の残存資源量は、2019年級群の同時期を上回っている。

2021年級群（1歳魚）は、2021年における0歳魚としての漁獲状況（主に西日本海域）は、前年を下回っている。沖合域においては、5月～6月の移行域幼稚魚調査（水産資源研究所）および9月～10月の北西太平洋秋季浮魚類資源調査（水産資源研究所）に基づく資源量指標値は前年を上回った（ただし、6月～7月の北西太平洋北上期浮魚類資源調査（水産資源研究所）に基づく指標値は前年を下回っており、不確実性は大きい）。現時点では不確実であるが、近年の本資源の主体は沖合加入群であることを踏まえ、2021年級群の加入量は前年並～上回る水準と考えられる。

2022年級群（0歳魚）に対応する2022年の産卵量は、1,315兆粒（2022年6月までの暫定値）であり、2021年（1,088兆粒）を上回った。マシラスとしての漁獲は、漁獲の中心である渥美外海～駿河湾において、前年を下回っており、西日本の海域における0歳魚としての漁獲も、前年を下回っている。沖合域の調査では、5月～6月の移行域幼稚魚調査において前年並のCPUEが見られたが、6月～7月の北西太平洋北上期浮魚類資源調査では前年を下回るCPUEとなった（近年の高水準は維持）。これらの情報から、現時点では不確実であるが、2022年級群の加入量は、前年並～下回る水準と考えられる。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

(1) 北薩～熊野灘（まき網、定置網）

北薩～熊野灘での2022年4月～6月の漁獲量は363トンと前年同期（7,486トン）を大きく下回った。すべての海域において前年を下回る漁獲となっていた。（漁獲量は各地主要港水揚資料および水揚物標本測定結果等からの推定値）

・来遊量：近年の漁獲状況から、今期の主な漁獲対象は0歳魚（2022年級群）であり、1歳（2021年級）以上が混じる。

北薩～薩南海域では、前期（4月～6月）の漁獲状況が前年を下回って推移していることから、今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

日向灘では、前期の漁獲状況が低調に推移しており、シラス類のマシラス混獲率も前年より低いことから、今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

豊後水道西側南部では、2021年11月以降に水揚げがほとんどなく、本海域への加入は少ないと考えられる。また、近隣海域への来遊も少ないことから、今期の来遊量は低調であった前年をさらに下回ると予測される。

豊後水道東側中南部では、前期の0歳魚の漁獲状況が前年を大きく下回っていることから、今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

宿毛湾、土佐湾では、シラス漁の漁況から0歳魚の発生は前年を下回ると考えられる。加えて、中型まき網の漁獲状況は前年を下回って推移している。以上から、来遊量は前年並～下回ると予測される。

紀伊水道外域西部では、本海域では成魚を漁獲する漁業が少ないため、漁況から来遊量を予測することは難しいが、近年の傾向から来遊量は前年並と予測される。

紀伊水道外域東部では、近年、8月～12月の1そうまき網での漁獲量が少ない傾向にあり、前期の棒受網の漁獲量も少なかったことから、今期の来遊量は低調であった前年並と予測される。

熊野灘では、0歳魚が主体となる定置網の漁獲状況は低調に推移しており、加えて、中型まき網においても0歳魚がほとんど漁獲されていない。本海域への加入は非常に少ない可能性が考えられ、今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

- ・漁期：各海域とも期を通じて漁獲される。
- ・魚体：近年の出現状況から、主体となる0歳魚は8 cm～16 cm前後。1歳以上は16 cm以上。

(2) 伊勢・三河湾～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

伊勢・三河湾～相模湾での2022年4月～6月の漁獲量は4,324トンとなり、前年同期（3,295トン）を上回った。駿河湾～相模湾で前年を上回る漁獲が見られた。

・来遊量：近年の漁獲状況から、今期の主な漁獲対象は0歳魚（2022年級群）であり、1歳（2021年級）以上が混じる。

伊勢・三河湾、渥美外海では、前期のマシラス漁獲量が前年を大きく下回っており、本海域への加入は少ない可能性がある。よって、今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

駿河湾、相模湾西部では、5月、6月の漁獲状況が前年並となっており、現在漁獲されている資源が引き続き漁獲対象になると考えられることから、今期の来遊量は低水準だった前年並と予測される。

相模湾東部では、マシラスの漁獲量が、低調であった前年をさらに下回っており、本海域への加入は少ない可能性がある。ただし近年は、マシラス漁獲量と8月～12月の漁獲量の関係が弱くなっていること、および前年同期は極めて低い漁獲状況であり、それを下回る可能性は低いと考え、今期の来遊量は低水準だった前年並と予測される。

- ・漁期：各海域とも期を通じて漁獲される。
- ・魚体：近年の出現状況から、主体となる0歳魚は10 cm～15 cm前後。1歳以上は15 cm以上。

(3) 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

房総以北のまき網での2022年4月～6月の漁獲量は12.9万トンとなり、前年同期（12.2万トン）並であった。漁場は房総～常磐海域、6月以降は三陸南部海域でも形成された。6月下旬以降、道東海域での操業が始まっている。房総以北の定置網等での2022年4月～6月の漁獲量は2.4万トンとなり、前年同期（3.6万トン）を下回った。

・来遊量：各年級群の資源状態と近年の漁獲状況から、今期の漁獲対象は、1歳（2021年級）以上が主体となる。0歳魚（2022年級）は、房総～三陸南部海域で8月以降に漁獲され、常磐以北では漁期終盤に多くな

る。

資源状態を反映して、1歳以上の来遊量は前年並～上回ると考えられる。漁期終盤に常磐以北で漁獲される0歳魚の来遊量は、現状ではかなり不確実であるが、現在得られている沖合域調査の結果から前年並～下回る水準と考えられる。房総～三陸南部海域において8月以降に漁獲される0歳魚の来遊量は、現時点での漁獲状況および産卵量と黒潮流路の関係から、極めて低調であった前年を上回るが低水準と予測される。本海域の漁獲の主体は1歳以上であることを踏まえ、全体としての来遊量は前年並～上回ると予測される。

・漁期・漁場：近年および直近の魚群の来遊状況から、まき網は、8月～10月は道東海域が主漁場となり、三陸～房総海域は小規模な漁場形成となる。11月～12月には三陸海域が主漁場となる。定置網は、各地で期を通じて散発的に漁獲されるが、12月以降に本格化する。

・魚体：近年の出現状況から、0歳魚は10 cm～14 cm 前後、1歳魚は14 cm～17 cm 前後、2歳魚は15 cm～18 cm 前後、3歳魚は16 cm～20 cm 前後、4歳魚は18 cm 以上。

カタクチイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2022年8月～12月）

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、船曳網

対象魚群：0歳魚（2022年級群）、1歳魚（2021年級群）、2歳魚（2020年級群）。

年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 西薩～常磐南部海域のシラス（船曳網）

(1) 来遊量：西薩～紀伊水道外域では予測が困難。伊勢湾、渥美外海では前年を下回る。遠州灘～駿河湾では前年並。相模湾では前年を下回る。鹿島灘～常磐南部海域では前年を下回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

2. 北薩～紀伊水道外域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：北薩～薩南海域では前年を上回る。日向灘では前年を下回る。豊後水道西側南部では前年並。豊後水道東側中南部では前年を上回る。宿毛湾では前年並。紀伊水道外域では主たる漁獲対象ではない。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：10 cm以下の0歳魚主体に、10 cm以上の1歳以上が漁獲される。

3. 熊野灘～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

(1) 来遊量：熊野灘ではまとまった漁獲がないため予測が困難。伊勢・三河湾、渥美外海では前年を下回る。駿河湾、相模湾では低調であった前年並。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：10 cm以下の0歳魚主体に、10 cm～14 cmの1歳魚が漁獲される。

4. 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：房総・常磐海域では予測が困難。三陸海域では前年並～下回る。道東海域では主たる漁獲対象とならない。

(2) 漁期・漁場：三陸海域の定置網および2そうまき網、房総沿岸海域の2そうまき網は期を通じて漁獲される。道東海域、常磐～房総海域の1そうまき網の主な漁獲対象にはならない。

(3) 魚体：6 cm～11 cmの0歳魚、7 cm～14 cmの1歳以上が漁獲される。

漁況の経過（2022年4月～6月）および見通し（2022年8月～12月）についての説明

1. 資源状態

カタクチイワシ太平洋系群の資源量は、令和3（2021）年度資源評価において、2002年の291万トンにピークに減少傾向に転じ、2020年は14.2万トンと推定された。資源動向は親魚量の最近5カ年の推移から横ばい傾向である。本系群は漁場が形成される沿岸域だけでなく、資源状態に応じて黒潮親潮移行域まで広く分布する。

令和3年度資源評価に基づくと、2020年級群（2歳魚）は加入量が207億尾と推定されており、2019年

級群の273億尾を下回った。水産資源研究所が実施している沖合域の調査船調査では、2021年の北西太平洋北上期浮魚類資源調査（以下、北上期調査）における推定1歳以上のCPUE（有漁点のCPUE、以下同様）と出現率は前年を下回った。一方、2021年の北西太平洋秋季浮魚類資源調査（以下、秋季調査）における推定1歳以上のCPUEは前年を上回った。ただし、秋季調査における分布中心は三陸北部～道東海域であり、東経155°以東の沖合でも出現はしたものの、低水準であった。以上のことから、2020年級群は低水準であると推測される。

2021年級群（1歳魚）は、2021年7月～11月に東海海域を中心に、カタクチイワシシラスや0歳魚として漁獲され、それらの漁獲量は前年並であった。沖合域の調査船調査では、2022年の北上期調査（暫定値）によると、推定1歳以上のCPUEと出現率は前年を下回った。2021年の秋季調査における推定0歳魚のCPUEは前年を上回ったが、分布中心は三陸北部～道東海域であり、東経155°以東の沖合では低水準であった。これらのことから、2021年級群の水準は2020年級群と同程度か下回ると推測される。

2022年級群（0歳魚）は、現時点ではその水準を予測することは難しい。2022年1月～6月までの産卵量（I～IV区の合計）は、1,183兆粒と2021年同期（2,289兆粒）を下回り、主要港における4月～6月のカタクチイワシシラス漁獲量は前年を下回った。2022年の北上期調査（暫定値）によると、推定0歳魚CPUEは前年を下回った。これらのことから、2022年級群の水準は2021年級群を下回ると推測される。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

(1) 西薩～常磐南部海域のシラス（船曳網）

・来遊量：西薩～紀伊水道外域では、シラスの漁場形成については予測が困難である。

伊勢湾、渥美外海では、4月～6月の漁獲量は、前年よりやや上回ったものの、7月現在、内湾に漁場は形成されず、内湾の資源量が少ない状況が続いている。また、内湾で漁獲された成魚の魚体サイズは小さく、成熟度も低く、伊勢湾内の卵採集数も、前年を下回っていることから、前年を下回ると予測される。

遠州灘～駿河湾では、潮岬～渥美外海（伊勢・三河湾内を除く）における5月～6月のカタクチイワシ産卵量（卵稚仔調査）が少なかった年は、7月～8月の主要6港シラス水揚量が少ない傾向にある。2022年の産卵量は25兆粒で、前年（29兆粒）並であったことから、7月～8月の水揚量は低調であった前年並と予測される。9月以降については、現時点で情報が無いため予測が困難である。

相模湾では、周辺海域（相模湾および東京湾口）で1月～6月に実施した卵稚仔調査では、カタクチイワシ卵の平均採集量は56.7粒であり、前年同期（171.4粒）および過去10年平均（111.4粒）を下回る低水準であった。そのため今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

鹿島灘～常磐南部海域では、8月～9月漁獲量は、7月の沿岸10m深水温と負の関係があり、2022年7月の沿岸10m深水温から、8月～9月漁獲量は前年を下回ると予測される。また、10月～12月漁獲量は8月～9月漁獲量と正の関係があることから、総じて、今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

・漁期：各海域とも期を通じて漁獲される。

(2) 北薩～紀伊水道外域（まき網、定置網）

・来遊量：北薩～薩南海域では、今期の漁獲主体となる0歳魚（2022年級群）は、4月～6月の水揚量が前

年を上回って推移していることから、前年を上回ると予測される。

日向灘では、2010年以降、今期の漁獲対象は沿岸発生群主体の0歳魚となっている。0歳魚の漁獲量は、1月～6月期の宮崎県まき網漁獲量および大分県まき網漁獲量の相乗平均値と正の関係にあり、この予測値が前年の宮崎県の漁獲量を下回ることから、来遊量は前年を下回ると予測される。

豊後水道西側南部では、0歳魚が水揚げの主体であった1月～6月期の水揚量が前年並であることから、今期の来遊量は低調であった前年並であると予測される。

豊後水道東側中南部では、周辺海域で発生したと推定される被鱗体長10 cm以下の0歳魚が漁獲の主体となる。まき網での水揚量が前年同期を大幅に上回ったことから、来遊量は前年を上回ると予測される。

宿毛湾では、期を通じて0歳魚、1歳（2021年級群）以上が漁獲の対象となる。上半期（1月～6月期）の宿毛湾小型まき網における「かえり」銘柄の水揚量と下半期の中型まき網水揚量には有意な正の関係が見られる。上半期の宿毛湾小型まき網における「かえり」銘柄の水揚量とこの正の関係式から予測される下半期の中型まき網水揚量は前年並であることから、来遊量は前年並と予測される。

紀伊水道外域では、未成魚・成魚は主たる漁獲対象ではない。

- ・漁期：各海域とも期を通じて漁獲される。
- ・魚体：10 cm以下の0歳魚主体に、10 cm以上の1歳以上が漁獲される。

(3) 熊野灘～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

・来遊量：熊野灘では、例年、マイワシなどにわずかに混じって漁獲されることが多いことから、今期もまとまった来遊はないと予測される。

伊勢・三河湾、渥美外海では、ぱっち網の操業が7月19日時点でも行われておらず、内湾の資源量は前年より少ないと予測される。また、6月～7月の内湾のシラスも少ないと見込まれるため、今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

駿河湾、相模湾西部では、例年、8月以降の定置網への入網は散発的であり、さらに近年は資源量が少ないため予測は困難である。ただし、近年の8月～12月は低調な水揚げが続いていることから、来遊量は低調であった前年並と予測される。

相模湾東部では、黒潮A型流路が継続している2018年以降、主要定置網の8月～12月漁獲量は数トンのレベルに留まっている（秋季に一時的にB型となった2020年を除く）。JCOPE2Mによる黒潮長期予測（6月29日発表）によると、大蛇行は少なくとも9月まで継続すると予測されており、今期も近年同様の不漁傾向が継続すると考えられる。以上のことから、今期の来遊量は低調であった前年並と予測される。

- ・漁期：各海域とも期を通じて漁獲される。
- ・魚体：10 cm以下の0歳魚主体に、10 cm～14 cmの1歳魚が漁獲される。

(4) 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

・来遊量：房総・常磐海域では、前年漁期の小型成魚が翌年漁期に大型成魚となって再来遊すると考えられている。房総海域では、近年は0歳魚（2022年級群）を主体に1歳魚（2021年級群）が混じる。0歳魚の来遊量は予測が困難である。常磐海域では、2021年～2022年冬春季期の漁獲量が少なく、水揚げもないた

め、1歳魚の来遊量は予測が困難である。

三陸南部海域では、1歳以上が漁獲の主体となる。今期は来遊が遅れており、現時点で来遊量の判断は難しいが、前期の千葉県漁獲動向や2022年の北上期調査の結果からは前年並～下回ると予測される。

三陸北部海域では、0歳魚と1歳魚が漁獲の主体となる。近年の資源状態及び漁獲動向から、まき網は前年並～下回る、定置網ではほとんど漁獲されないと予測される。

道東海域では、カタクチイワシは釧路水産試験場による調査船調査において2010年代には殆ど漁獲されなかったが、2021年の漁期中調査（流し網）の平均CPUEが15年ぶりに1000（尾/回）を超えたほか、2022年には5月調査（表中層トロール）の平均CPUEが過去最多となる549（尾/h）を記録した。これらのことから、来遊量はここ2年間で増加傾向にあると推測される。しかし、マイワシの来遊量が依然として多く、カタクチイワシは漁業の主対象種とはならないと予測される。

・漁期・漁場：資源量が多い年には、道東海域のまき網では8月～10月に、常磐～房総海域の1そうまき網では12月以降に漁場が形成されていたが、資源量の少ない近年は主な漁獲対象にはならない。三陸南部海域の定置網および房総沿岸海域（外房～九十九里海域）の2そうまき網は期を通じて漁獲される。

・魚体：6 cm～11 cmの0歳魚、7 cm～14 cmの1歳以上が漁獲される。

ウルメイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2022年8月～12月）

対象海域：北薩～熊野灘

対象漁業：まき網、定置網、棒受網、多鈎釣

対象魚群：0歳魚（2022年級群）、1歳（2021年級群）以上。

年初に加齢。魚体は被鱗体長。

- (1) 来遊量：北薩～薩南海域では前年並。日向灘～宿毛湾では前年を下回る。紀伊水道外域では前年を上回る。熊野灘では前年並～上回る。全体として前年を下回る。
- (2) 漁期：期を通じて漁獲される。
- (3) 魚体：0歳魚（8 cm～20 cm）が主体となる。海域により1歳以上（20 cm以上）も対象となる。

漁況経過（2022年1月～6月）および見通し（2022年8月～12月）についての説明

1. 資源状態

2021年度の資源評価に基づく、太平洋および瀬戸内海における漁獲量（農林統計）は、2015年に4.9万トンと過去最高となったが、2016年以降は減少し、2020年は2.3万トンまで減少したこと、卵稚仔調査で得られる卵密度データを標準化した資源量指標値（平均値を1とする相対値）は2016年に1.89と過去最高となり、2017年～2019年はやや減少したものの1.36～1.58と比較的高い水準で推移したが、2020年は0.82と減少したことから、資源は減少傾向にあると判断されている。

2021年の農林統計による漁獲量は3.9万トンと2020年を大きく上回ったが、2022年1月～6月の主要港水揚量は4,078トンと前年同期（10,399トン）を大きく下回り低調に推移している。また、2021年の資源量指標値は未推定であるが、資源量指標値の基礎となる太平洋および瀬戸内海（海区Ⅰ～海区Ⅲ、海区Ⅶ）の産卵量（前年9月～当年8月を1年とする）は2016年～2021年にかけて205兆粒～70兆粒と減少しており、2021年9月～2022年6月の産卵量は39兆粒と前年同期（2020年9月～2021年6月、65兆粒）を下回っている。以上のことから、2021年に漁獲量が増加したものの、資源は依然減少傾向にあると考えられる。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

2022年後期（8月～12月）は0歳魚（2022年級群）主体の漁況になることが推測される。予測対象海域（鹿児島県～三重県）の主要港における前期（1月～6月）漁獲量と後期（8月～12月）漁獲量には、強い正の関係がある。2022年前期（1月～6月）の漁獲量は4,078トンであった。2000年～2021年の前期（1月～6月）漁獲量と後期（8月～12月）漁獲量の間関係を用いて、2022年後期（8月～12月）の漁獲量は7,604トンと予測され、好調であった2021年後期（8月～12月）の漁獲量22,725トンを下回った。このことから、今期（2022年8月～12月）の来遊量は好調であった前年を下回ると予測される。

北薩～薩南海域では、0歳魚（10 cm～17 cm）が主体となる。漁獲の主体となる0歳魚は、2022年4月～6月の漁獲量が前年並で推移したことから、来遊量は前年並と考えられる。

日向灘では、0歳魚、1歳魚（2021年級群、11 cm～20 cm台）が主体となる。0歳魚の漁況と、指標値（鹿児島県まき網1月～5月漁獲量、愛媛県まき網4月～6月漁獲量の相乗平均）の間に正の関係が認められ、2022年の予測値は前年の宮崎県の漁獲量を下回っていることから、来遊量は前年を下回ると予測される。

豊後水道西側南部では、8月～10月は0歳魚（10 cm～15 cm）が主体となる。4月～6月のまき網漁獲量が前年を下回ったことから、来遊量は好調であった前年を下回ると予測される。

豊後水道東側南部では0歳魚が主体となる。加入時期にあたる4月～6月と、0歳魚が漁獲の主体とな

る8月～12月において、両期間の漁獲量には正の相関関係が認められる。この関係から判断すると来遊量は前年を大きく下回ると予測される。

宿毛湾では、0歳魚、1歳魚が漁獲される。宿毛湾の中型まき網における1月～6月漁獲量と8月～12月の漁獲量の間には、正の関係が認められ、この関係から来遊量は前年を下回ると予測される。

紀伊水道外域西部では、例年この時期にはほとんど漁獲がなく、来遊量を判断することは難しいが、来遊量は低調だった前年を上回ると予測される。

紀伊水道外域東部では、2022年4月～6月の1そうまき網は漁獲が無かった。2018年以降は8月～12月の漁獲が無く、2022年も同様である可能性がある。2022年4月～6月の棒受網は前年を上回る漁獲があった。これらのことから、来遊量は前年を上回ると予測される。

熊野灘では0歳魚（8 cm～20 cm）が主体となり1歳魚～3歳魚（20 cm以上）も漁獲される。例年、8月～12月に漁獲主体となるのは0歳魚である。2022年は定置網における5月、6月の漁況が0歳魚主体に前年を上回っているため、来遊量は前年並～上回ると予測される。

マアジ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2022年8月～12月）

対象海域：北薩～熊野灘、相模湾

対象漁業：まき網、定置網

対象魚群：0歳魚（2022年級群）、1歳魚（2021年級群）、
2歳魚（2020年級群）、3歳（2019年級群）以上。
年初に加齢、魚体は尾叉長。

1. 北薩～土佐湾（まき網、定置網）

(1) 来遊量：北薩～薩南海域では前年を上回る。日向灘では前年並。豊後水道南部西側では前年並～下回る。豊後水道南部東側では前年並～上回る。宿毛湾、土佐湾では前年を下回る。

(2) 魚体：北薩～薩南海域では0歳魚、1歳魚主体、日向灘、豊後水道南部では0歳魚が主体、宿毛湾、土佐湾では0歳魚、1歳魚が主体。0歳魚は19 cm以下、1歳魚は19 cm～25 cm、2歳魚以上は23 cm以上。

2. 紀伊水道外域～熊野灘（まき網、定置網）

(1) 来遊量：紀伊水道外域では前年並、熊野灘では前年並～上回る。

(2) 魚体：紀伊水道外域西部では0歳魚主体、紀伊水道外域東部では2歳魚主体、熊野灘では1歳魚主体に0歳魚および2歳以上が混じる。0歳魚は19 cm以下、1歳魚は19 cm～25 cm、2歳魚は23 cm～27 cm、3歳以上は25 cm以上。

3. 相模湾（定置網）

(1) 来遊量：伊豆東岸では前年を下回る。西湘地区では前年並。

(2) 魚体：主体となる0歳魚は19 cm以下、1歳魚は19 cm～22 cm。

漁況の経過（2022年1月～6月）および見通し（2022年8月～12月）についての説明

1. 資源状態

資源量は1986年以降増加し、1990年代半ばは15万トン～16万トンと高い水準で推移したが、1997年以降減少した。2009年～2013年は横ばいで推移したが、その後再び減少している。加入量は1993年をピークに減少し、2009年以降2.6億尾～7.1億尾と低い水準で推移している。令和3年度（2021年度）資源評価において、2020年の資源量は3.3万トン、親魚量は1.7万トンと推定された。

2019年級群（3歳魚）の加入量は2.6億尾と推定され、2021年後半の漁獲は低調に推移しており、残存資源量は少ない。

2020年級群（2歳魚）の加入量は2.8億尾と推定された。低水準ながら2021年前半の漁獲の主体となったが、2021年後半の漁獲は低調に推移しており、残存資源量は少ないと考えられる。

2021年級群（1歳魚）は、いずれの海域でも漁獲対象になる。現状での各県地先の加入量の指標値は、宇和島港まき網、宿毛湾まき網、串本棒受網、千葉県定置網において前年を上回っており、伊勢湾小型底びき網（まめ板）では前年並、宮崎県南部定置網（4月～6月）では前年を下回った。4月～11月の指標値の相乗平均は2020年級群を上回ることから、2021年級群の加入量は2020年級群を上回ると考えられる。

2022年級群（0歳魚）は、いずれの海域でも漁獲対象になる。2022年1月～6月の漁獲尾数（主要港集計、暫定値）は5百万尾と、前年同期（主要港集計、6百万尾）を下回った。各県地先の0歳魚の漁獲状況を4月～6月と比較すると、宮崎県南部定置網アジ仔CPUEは前年を上回ったが、宇和島港まき網ゼンゴCPUE、宿毛湾まき網ゼンゴCPUE、串本棒受網当歳魚漁獲量（5月～6月）、伊勢湾小型底びき網（まめ板）当歳魚漁獲量、伊豆東岸定置網当歳魚漁獲量は前年を下回った。現時点での見積もりは不確実であるが、2022年級群（0歳魚）の加入量は2020年級群並かこれを下回る低い水準と考えられる。

2. 来遊量、漁期・漁場

本魚種は予測期間を通じて漁獲対象となる。来遊量については、海域ごとに前期の漁況に基づき予測した。年齢別体長は、これまでの体長組成の推移から概ね次のとおりである。0歳魚（2022年級群）：19 cm以下、1歳魚（2021年級群）：19 cm～25 cm、2歳魚（2020年級群）：23 cm～27 cm、3歳（2019年級）以上：25 cm以上。3歳以上の年齢に対応した体長区分は現状では困難である。なお近年の報告によると、相模湾以東では尾又長20 cm台に3歳から10歳以上の高齢魚がみられることが明らかになってきている。したがって相模湾については報告された年齢体長キーから判断し、0歳魚：19 cm以下、1歳魚：19 cm～22 cmとした。

(1) 北薩～土佐湾

北薩～薩南海域では、0歳魚、1歳魚（2022年級群、2021年級群）が漁獲の主体となる。2022年5月～6月の中型まき網における0歳魚、1歳魚（豆、仔銘柄）の水揚量が前年を上回っていることから、今期（8月～12月漁期）も前年を上回ると考えられる。

日向灘では、0歳魚が漁獲の主体となる。0歳魚の漁獲量は日向灘南部大型定置網アジ仔 CPUE、宇和海中部まき網漁獲量、大分県まき網漁獲量を用いた指標値と正の関係が認められ、この関係から判断して今期の来遊量は前年並と予測される。

豊後水道南部西側では、0歳魚が漁獲の主体となる。2022年1月～6月における豊後水道南部主要3港の水揚量は前年を上回ったが、4月以降は平年を下回っており、低調な漁獲が続いていたため、前年並～下回ると予測される。

豊後水道南部東側では、0歳魚が漁獲の主体となる。5月～6月と8月～12月の漁獲量には正の関係が認められ、この関係から判断して今期の来遊量は前年並～上回ると予測される。

宿毛湾、土佐湾では中型まき網で0歳魚の来遊が前年より少ないことから、来遊量は前年を下回ると考えられる。

(2) 紀伊水道外域～熊野灘

紀伊水道外域西部では、2022年1月～6月の漁獲量は前年同期を下回って低調であった。例年8月～12月の漁獲は低調であり、漁況から来遊水準を判断することが難しいが、近年の動向から前年並と予測される。

紀伊水道外域東部では、2歳魚（2020年級群）が主体で漁獲されると考えられる。潮岬沖の黒潮の離岸状況次第で、来遊および漁場形成条件が好転する可能性はあるが、2022年1月～6月の漁獲状況から、来遊量は前年および前年並と予測される。

熊野灘では、前期のまき網の漁況から1歳魚（2021年級群）の来遊量は前年を下回るが、0歳魚（2022年級群）については定置網の漁況から前年を上回ると考えられる。以上総じて、前年並～上回ると予測される。

(3) 相模湾

伊豆東岸では、0歳魚（2022年級群）が漁獲の主体となる。1月～6月の漁獲尾数と7月～12月の漁獲尾数の関係式から来遊量は前年を下回ると予測される。

西湘地区では、0歳魚が漁獲の主体となり、1歳魚（2021年級群）も漁獲される。1月～6月の0歳魚漁獲量と7月～12月のマアジ総漁獲量には一定の関係性が認められており、この関係から判断して来遊量は前年並であると予測される。

(4) 房総～三陸海域の漁獲情報

房総～鹿島灘海域における北部まき網の2022年1月～6月の漁獲量は35トン（TACシステム）と、極めて低調であった前年同期97トンを大きく下回った。今期の予測期間中、1そうまきはマイワシ、サバ、スルメイカを対象とした三陸海域以北での操業が中心となり、マアジは漁獲の主な対象とならない。

仙台湾～三陸海域では、2022年1月～6月の漁獲量は57トン、岩手県の2022年1月～6月の定置網による漁獲量は14トンと前年を上回った。青森県では2022年1月～6月の漁獲量は平館定置網を中心に34トンとなり、前年を上回った。

マサバおよびゴマサバ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2022年8月～12月）

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、棒受網、たもすくい等

対象魚群：0歳魚（2022年級群）、1歳魚（2021年級群）、2歳魚（2020年級群）、
3歳魚（2019年級群）、4歳魚（2018年級群）、5歳魚（2017年級群）、
6歳（2016年級群）以上。
年初に加齢。魚体は尾叉長。

1. 北薩～日向灘～豊後水道南部～土佐湾（まき網、定置網等）

- (1) 来遊量：北薩～薩南海域、土佐湾ではゴマサバ主体に漁獲され、サバ類全体としては前年を下回る。日向灘、豊後水道南部ではマサバ主体に漁獲され、サバ類全体としては前年並～下回る。
- (2) 漁期：期を通じて漁獲される。
- (3) 魚体：ゴマサバは北薩～薩南海域では32 cm～37 cm（3歳魚～5歳魚）主体、日向灘～豊後水道南部では20 cm～32 cm（0歳魚、1歳魚）主体、土佐湾では30 cm～38 cm（3歳魚～5歳魚）主体。マサバは日向灘～豊後水道南部では30 cm以下（0歳魚、1歳魚）主体。

2. 紀伊水道外域（まき網、定置網）

- (1) 来遊量：マサバを主体とするサバ類全体としては前年を下回る。
- (2) 漁期：期を通じて漁獲される。
- (3) 魚体：マサバは28 cm～34 cm（1歳魚～4歳魚）主体、ゴマサバは28 cm～33 cm（1歳魚）主体。

3. 熊野灘（まき網、定置網）

- (1) 来遊量：マサバ、ゴマサバともに低水準。
- (2) 漁期：期を通じて漁獲される。
- (3) 魚体：マサバ、ゴマサバともに30 cm～35 cm（1歳魚～4歳魚）主体に15 cm～25 cm（0歳魚）も漁獲される。

4. 伊豆諸島周辺海域（棒受網、たもすくい）

- (1) 来遊量：マサバは低水準。ゴマサバ1歳魚は前年を上回る。2歳魚は前年を上回る。3歳魚は前年を下回る。ゴマサバ全体としては低調であった前年並～上回る。サバ類全体としては低水準。
- (2) 漁期・漁場：期を通じて伊豆諸島北部海域が主漁場となり、三宅島周辺海域、銭洲海域にも漁場が形成される。
- (3) 魚体：ゴマサバは29 cm～34 cm（2歳魚、3歳魚）主体に、25 cm～27 cm（1歳魚）および33 cm以上（4歳以上）も漁獲される。

5. 犬吠～三陸海域、道東海域（まき網、定置網等）

- (1) 来遊量：マサバ1歳魚は前年を下回る。2歳魚は前年を上回る。3歳魚は前年を下回る。4歳魚は前年を上回る。5歳魚は前年並。6歳魚は前年を上回る。マサバ全体としては前年を上回る。ゴマサバは混獲される程度。サバ類全体としては前年を上回る。
- (2) 漁期・漁場：定置網は期を通じて漁獲される。まき網漁場は、8月～10月は道東～三陸南部海域、11月～12月は三陸北部～犬吠海域に主に形成される。
- (3) 魚体：マサバは22 cm～36 cm（2歳以上）主体に、18 cm～27 cm（1歳魚）も漁獲される。

漁況の経過（2022年1月～6月）および見通し（2022年8月～12月）についての説明

1. 資源状態

1) マサバ

資源量は1990年代～2000年代前半に極めて低い水準にあったが、2013年以降の加入量水準の高い年級群の発生により増加傾向を示し、2018～2020年の資源量は、資源量を推定している1970年以降で最高水準となっている。2013年級群以降、成長および成熟の遅れがみられている。

2015年級群（7歳魚）以上の残存資源量は最近10年（以下、近年）としては多い。

2016年級群（6歳魚）は、2021年11月時点の資源評価（コホート解析）による推定加入量が99億尾と近年の平均（107億尾）程度の水準である。

2017年級群（5歳魚）は、推定加入量が82億尾と近年の平均を下回る水準である。

2018年級群（4歳魚）は、推定加入量が214億尾と卓越して高い水準であるが、これまでの各地漁業の漁況では、推定加入量が262億尾と卓越して高い2013年級群の同時期の漁獲量を大きく下回っており、加入量の見積もりの不確実性は依然として高い。

2019年級群（3歳魚）は、推定加入量が53億尾と近年の平均を下回る水準である。

2020年級群（2歳魚）は、推定加入量が144億尾と近年の平均を上回る水準である。

2021年級群（1歳魚）の加入量は、北西太平洋北上期浮魚類資源調査（水産資源研究所、6月～7月）、北西太平洋秋季浮魚類資源調査（水産資源研究所、9月～10月）および再生産関係から、近年の平均程度の水準と推定されている。

2022年級群（0歳魚）は、北西太平洋北上期浮魚類資源調査における出現率が66%であり、昨年と同調査よりやや低い値であることから、現時点での加入量の見積もりは不確実であるが、近年の平均程度の水準と見込まれる。

2) ゴマサバ

資源量は1990年代後半から高い水準にあったが、2011年以降、減少傾向を示し、2020年の資源量は、資源量を推定している1995年以降で最低水準となっている。

2017年級群（5歳魚）は、2021年11月時点の資源評価（コホート解析）による推定加入量が2.8億尾と近年の平均（4.5億尾）を下回る水準であり、残存資源量は高齢となって少なくなっている。

2018年級群（4歳魚）は、推定加入量が2.4億尾と近年の平均を下回る水準である。

2019年級群（3歳魚）は、推定加入量が2.0億尾と近年の平均を下回る水準である。

2020年級群（2歳魚）は、推定加入量が1.5億尾と近年の平均を大きく下回る水準である。

2021年級群（1歳魚）の加入量は、再生産関係から近年の平均を下回る水準と推定されている。

2022年級群（0歳魚）は、定置網などの各地漁業で漁獲がみられているものの、漁況は低調に推移していることから、現時点での加入量の見積もりは不確実であるが、近年の平均を下回る水準と見込まれる。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

1) マサバ

(1) 来遊量

資源状態の項に前述のとおり、0歳魚（2022年級群）は、これまで得られている情報から加入量が近年の平均程度の水準と考えられ、来遊量は前年並となる。1歳魚（2021年級群）は、加入量が近年の平均程度の水準と考えられ、来遊量は前年を下回る。2歳魚（2020年級群）は、加入量が近年の平均を上回る水準と考えられ、来遊量は前年を上回る。3歳魚（2019年級群）は、加入量が近

年の平均を下回る水準であり、来遊量は前年を下回る。4 歳魚（2018 年級群）は、加入量が卓越して高い水準であり、来遊量は前年を上回る。5 歳魚（2017 年級群）は、加入量が近年の平均を下回る水準であり、来遊量は前年並。6 歳魚（2016 年級群）は、加入量が近年の平均程度の水準であり、来遊量は前年を上回る。7 歳（2015 年級群）以上の来遊量は前年並。全体の来遊量は前年を上回る。

(2) 漁期・漁場、魚体

1 月～6 月の漁獲量は、犬吠以北海域のまき網は 34.0 千トン（前年同期実績 86.5 千トン）、犬吠以北海域の定置網・底びき網などは 27.5 千トン（同 22.5 千トン）、伊豆諸島周辺海域のたもすくい・棒受網は 1.4 千トン（同 3.3 千トン）、伊豆半島～駿河湾～熊野灘のまき網・定置網は 13.1 千トン（同 42.1 千トン）、紀伊水道外域～北薩海域の全漁業では 6.5 千トン（同 15.5 千トン）であった。（漁獲量は各地主要港水揚げ資料および水揚げ物標本測定結果等からの推定値）

1 月～6 月の魚体は次のとおりであった。犬吠以北海域のまき網では、1 月は 29 cm～35 cm の 3 歳以上が主体に、2 月は 23 cm～27 cm の 2 歳魚、3 歳魚が主体に、3 月は 18 cm～25 cm の 1 歳魚、2 歳魚が主体に漁獲された。4 月以降は極めて低調な漁況となった。三陸海域の定置網では、4 月以降に 27 cm～37 cm の 3 歳以上が主体に漁獲され、底びき網では、21 cm～37 cm の 2 歳以上が主体に漁獲され、19 cm～25 cm の 1 歳魚も漁獲された。産卵場である伊豆諸島周辺海域では主に伊豆諸島北部海域が漁場となり、28 cm～39 cm の 3 歳魚～8 歳魚が主体に漁獲された。駿河湾～北薩のまき網では、伊豆諸島周辺海域とほぼ同様の魚体が漁獲され、4 月～6 月には 20 cm 以下の 0 歳魚も漁獲された。

本予測期間は、犬吠以北海域のまき網、定置網等での漁獲が中心となり、2 歳以上が主体に 1 歳魚も漁獲される。魚群の南下は昨年と同様に遅れる可能性があり、まき網漁場は 8 月～10 月は道東～三陸南部海域に、11 月～12 月は三陸北部～犬吠海域に形成される。各地の定置網では期を通じて断続的に漁獲される。伊豆諸島周辺海域以西への来遊量は低水準ではあるが、熊野灘、紀伊水道外域では 1 歳魚～4 歳魚主体、豊後水道南部、日向灘では 0 歳魚、1 歳魚主体に、一時的にまとまった漁獲がみられる。

漁獲の主体となる犬吠以北海域の年齢別尾叉長は、これまでの体長組成の推移、年齢査定の結果から概ね次のとおりである。1 歳魚：18 cm～27 cm 前後、2 歳魚：22 cm～28 cm 前後、3 歳魚：26 cm～32 cm 前後、4 歳魚：28 cm～36 cm 前後、5 歳魚：30 cm～37 cm 前後、6 歳以上：32 cm 以上。0 歳魚は伊豆諸島以西でも漁獲され、例年の傾向から 15 cm～25 cm 前後と予測される。（各年齢の体長の範囲は広く重なり合っている）

2) ゴマサバ

(1) 来遊量

資源状態の項に前述のとおり、0 歳魚（2022 年級群）は、直近までの漁況を考慮すると来遊量は低調であった前年並と考えられる。1 歳魚（2021 年級群）は、来遊量は低調であった前年を上回る。2 歳魚（2020 年級群）は、加入量が近年の平均を大きく下回る水準であり、来遊量は前年を下回る。3 歳魚（2019 年級群）は、加入量が近年の平均を下回る水準であり、来遊量は低調であった前年並となる。4 歳（2018 年級群）以上は残存資源量が少なくなっており、漁獲の主体とならない。ゴマサバの来遊量は、北薩～薩南海域、土佐湾、熊野灘では前年を下回り、伊豆諸島周辺海域では低調であった前年並～上回り、日向灘、豊後水道南部、犬吠以北海域では混獲される程度にとどまり、全体としては低水準の来遊量となる。

(2) 漁期・漁場、魚体

1 月～6 月の漁獲量（全漁業）は、北薩～紀伊水道外域は 6.1 千トン（前年同期実績 6.6 千トン）、熊野灘～伊豆諸島周辺海域は 3.4 千トン（同 5.6 千トン）、犬吠以北海域は 2.6 千トン（同 3.0 千ト

ン)であった。(漁獲量は各地主要港水揚げ資料および水揚げ物標本測定結果等からの推定値)

1月～6月の漁獲の主体は、北薩～薩南海域では3歳魚～6歳魚、日向灘～豊後水道南部では0歳魚、1歳魚、紀伊水道海域では1歳魚、熊野灘では1歳魚～5歳魚、伊豆諸島周辺海域では2歳魚～5歳魚、犬吠～三陸海域では4歳魚、5歳魚であった。

本予測期間における各地の漁期・漁場と魚体は、北薩～薩南海域では3歳魚～5歳魚主体、日向灘～豊後水道南部では0歳魚、1歳魚主体、土佐湾では3歳魚～5歳魚主体、紀伊水道外域では1歳魚主体、熊野灘では1歳魚～4歳魚主体に、それぞれ期を通じて漁場が形成される。伊豆諸島周辺海域では、伊豆諸島北部海域を中心に2歳魚、3歳魚主体に1歳魚、4歳以上も混じり期を通じて漁場が形成されるが、黒潮流路によっては三宅島周辺海域、銭洲海域にも漁場が形成される。犬吠以北海域のまき網では混獲される程度にとどまり、定置網では一時的にまとまった漁獲がみられる。

年齢別尾叉長は、これまでの体長組成の推移、年齢査定の結果から概ね次のとおりである。0歳魚：20 cm～25 cm 前後、1歳魚：25 cm～32 cm 前後、2歳魚：27 cm～34 cm 前後、3歳魚：29 cm～37 cm 前後、4歳以上：32 cm 以上。(各年齢の体長の範囲は広く重なり合っている)

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場	和歌山県水産試験場
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	徳島県立農林水産総合技術支援センター 水産研究課
岩手県水産技術センター	高知県水産試験場
宮城県水産技術総合センター	愛媛県農林水産研究所 水産研究センター
福島県水産海洋研究センター	大分県農林水産研究指導センター 水産研究部
茨城県水産試験場	宮崎県水産試験場
千葉県水産総合研究センター	鹿児島県水産技術開発センター
東京都島しょ農林水産総合センター	地方独立行政法人 大阪府立環境農林水産総合研究所 水産研究部 水産技術センター
神奈川県水産技術センター	香川県水産試験場
静岡県水産・海洋技術研究所	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
愛知県水産試験場 漁業生産研究所	(取りまとめ機関) 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所
三重県水産研究所	